

第 12 回英語語法文法セミナー

テーマ

「英語学的遺産に学ぶ
—英語学の名著をひもとき現代的な課題に取り組む」

司会・講師 吉良文孝（日本大学）
講師 柏野健次（大阪樟蔭女子大学名誉教授）
講師 八木克正（関西学院大学名誉教授）

日時 : 平成 28 年（2016 年）8 月 8 日（月）、13.30 ～ 17.30
会場 : 関西学院大学大阪梅田キャンパス
(大阪市北区茶屋町 19-19 アプローズタワー14 階 1405 教室)

プログラム :

13.30 開始 会長挨拶とセミナー世話役からの全体趣旨説明
13.40 ～ 14.40 吉良文孝（日本大学）
「温故知新の英語語法研究」
----- 休憩 -----
15.00 ～ 16.00 柏野健次（大阪樟蔭女子大学名誉教授）
「Dr. Bolinger の言語直観」
----- 休憩 -----
16.20 ～ 17.20 八木克正（関西学院大学名誉教授）
「過去の研究に学んで現代の課題に取り組む—実証的研究のあり方を考える」
17.30 セミナー終了

※質疑応答は講義毎に行ないます。

参加費（資料代を含む）：2,000 円（当日、受付にてお支払いいただきます。）

※本セミナーは、学会会員以外の方を含め広く開かれているものですのでどなたでも自由に参加できます。会場収容人数（定員 80 名）の関係から、参加ご希望の方は平成 28 年 7 月 31 日までに、件名を「セミナー参加希望」として segu.seminar@gmail.com までお知らせください。先着順で受け付けます。

各講師の講義概要

①「温故知新の英語語法研究」

吉良文孝（日本大学）

英語学的遺産に学ぶことによって、一見すると何の変哲もないような文法現象にも、その背後には非常に単純で美しいまでの説明原理が存在することを再認識したい。

本講義では、①心的態度（モダリティ）表出の仕組み、②*ing*形式の表わす意味について考える。①に関しては、モダリティの観点から、If... *were to* 構文とIf... *should* 構文の表わす意味と語用論的な振る舞い、また、hope/see (to it)/take careに続くthat節内における認識的willの表出メカニズムについて考える。このあたりの説明原理は「発話者の確信の有無」であるが、そこでの考察の妥当性がコーパス検索によっても裏づけされることを確認する。

②については、Bolinger のいう「意味と形式の一対一の対応関係」の観点から、*ing* 形の表わす意味について考察する。*Ing* 形式に通底する意味は「前段階性」(precedency)であることを仮設し、前段階性の概念が様々な *ing* 表現の意味用法を説明できることを確認する。具体的には、未来表現としての現在進行形と *be going to* は、ともに「予謀」を表わすが、まったく同じ意味を表わすわけではない。両者の違いはどこから生ずるのか。「なりゆき」を表わす *will be -ing* の意味特徴は何か。さらには、条件節および帰結節における *be going to* の意味合い、進行形の強調表現 (Let's *be going*. や It is high time 構文に見られる *ing* 形の意味するもの) など、時間の許す限り考えてみたい。

②「Dr. Bolinger の言語直観」

柏野健次（大阪樟蔭女子大学名誉教授）

Dr. Bolinger (1907-1992) ほど言語直観の鋭い学者はいない。本講義ではその一端を紹介する。

同氏の基本的な考え方は、one meaning, one form (「1つの意味」対「1つの形」) と linear modification (線状的意味限定：文頭から文末に移るにつれて意味解釈の幅が狭くなる) の2つであると言える。例えば、語に関しては“-one”(e.g. someone) と“-body”(e.g. somebody) は意味が異なる、また、構文については(1) Playing golf is fun. と(2) It is fun playing golf. は意味が違うというものである。前者では、“-one”は親密さ(intimacy)を表し、“-body”は心的距離(distance)を表すと説き、後者では「線状的意味限定」の原理が働き、(1)は実際にゴルフをしている場合だけでなく、頭の中で想像している場合にも使えるが、(2)では通例、実際にゴルフをしていることを伝えると説く。

しかし、氏のこの主張は langue/ competence (言語体系) のレベルのものであることに注意する必要がある。parole/ performance (実際の言語使用) のレベルでは、多くのネイティブ・スピーカーは上に挙げた2つの表現の間にあまり意味の差は認めないように思う。

Dr. Bolinger ご自身も言われるように「言葉よりも心の方が自由」(The mind is freer than the tongue) なのだから、この langue と parole 間のずれは当然であろう。

③「過去の研究に学んで現代の課題に取り組む—実証的研究のあり方を考える」

八木克正（関西学院大学名誉教授）

今の実証的な文法や語法研究に引用や参照される参考文献は海外のものが大半を占める。あたかも日本には参考にするべき文献が（ほとんど）ないかのようである。そこで、これまで百年余りの間に蓄積された日本の独創的な英語学研究、言うなれば「日本の英語学研究」の考え方、方法を参照しながら、文献の調べ方やデータの読み方などを具体的に考えてゆきたいと思う。コーパスから得たデータをどう読むか、インフォーマントの反応をどう解釈するか、どのような文献を参考にするかは根本的に重要な問題である。Rumor has it that ... はどのような構文なのか、例示を言う such as の後には名詞以外にどのような形式のものがくるのか、A whale is no more a fish than a horse is. の than 以下がなぜ否定の意味に訳されるのか、It is high time that に続く節内の動詞の形は何か、Hidden as it was, ... の as はどのような用法か、I was little surprised at the news. の little はなぜおかしいのか、“Yes, indeed.”は可能だが“No, indeed.”は可能か、My hobby is reading books. が普通で My hobby is to read books. は普通でないのはなぜか、などの具体的問題を通じて、時間の許す限り考えてみたいと思う。